

物置に葉研錆びるる震災忌  
 敬礼のひとつもしたき牽牛花  
 仕舞には蝮酒出る御師の宿  
 甚平の脛に戦の傷のあり  
 手拍子に背中押さるる生身魂

50

聞き耳を風に立てるる今朝の秋  
 新秋の雑魚振り落とす四手網  
 深更に青々とある鱗雲  
 稲妻に横取りされし妻の貌  
 稲光阿吽の仁王甦る

50

何買ふでなく草市に紛れをり  
手の込んだ肴にあらず猿酒  
街灯をまとふ浮塵子の有耶無耶に  
書齋とは逃げ場なりけり昼ちちろ  
這ひ這ひの子のがちやがちやと向き合へり

鳳仙花弾かれたくて紅を増す  
ほろほろと萩ほろほろと零れけり  
燕帰る昨日の空の無かりけり  
鳴き砂に混じる砂鉄や海猫帰る  
銀漢の尾の触れ佐渡の怒濤かな

かなかなの鳴き継ぐ全戸灯るまで  
秋声を聴き父の声聞き洩らす  
反古燃ゆる色なき風に飛び火して  
せせらぎのやうに笹より新小豆  
秋彼岸母の形見を姉が着て

消灯の後がちやがちやの始まれり  
がちやがちやの夜の一角を食みてをり  
狐花聞きをり野良の立ち話  
空席に案山子を立てて応援す  
かなかなや荒るる山河を平らかに